

# 道の駅 あんだい Road Station ANDAI

準会員 浅井郁明 ASAI Takaaki  
東北学院大学大学院 Tohoku Gakuin University Graduate School

## 背景と目的

震災や台風など、近年は日本全国で災害が発生し避難が必要となる  
ところが多い。一般的な避難所といえば地区内の小学校や市民センター  
などである。そのような施設には一時的な避難所として機能できるよう  
に、食料や最低限の生活用品が備蓄されている。そのような備えがあ  
るといっても、避難所での生活水準は低い。災害が発生したことによ  
る精神的な不安も重なり、避難所での生活は長引くにつれ過酷なもの  
になる。

日本は自然災害が多い地域でありながら避難所の生活水準は他国の  
避難所と比べても低く”災害対応後進国”と呼ばれている。本提案で  
はこれからも必要とされる避難所について、普段から地域の人々に親  
しまれながら、災害時にも避難者の心をやわらげられその後は仮設住  
宅となる、用途を変えながら地域に根づく道の駅の提案である。

## 状況によって変化する道の駅

地元の食材や工芸品の販売はもちろん、飲食店、温泉、レジャー  
広場などを備え、地域の人はもちろん県外から観光に来た人も楽しむ  
施設とする。

また災害対応については、店舗などで利用している家具を組み替える  
ことで避難所として機能できる間仕切りや、仮設住宅として住むことが  
できる環境を整えることができるように計画した。

普段から店舗で利用している家具を転用することにより、平常時のあ  
たたかみや居心地の良さを災害時にも用意することができる。現状の  
避難所の寒々とした雰囲気や極めて劣悪な環境ではなく、傷ついた  
精神面を癒してくれる避難施設となる。

## 道の駅あんだいの変化と用途

phase1 通常時 観光拠点としての道の駅あんだい  
七ヶ浜の農産物や海産物、  
工芸品を販売する。  
町民だけでなく観光客にも親しまれる  
七ヶ浜の観光拠点となる。

phase2 災害発生時 避難所としての道の駅あんだい  
災害時には避難所に変化。  
非常食だけでなく、通常の食材もあり  
元の店舗の雰囲気そのままの避難所と  
なるため疲労感を軽減できる。

phase3 災害復興時 仮設住宅としての道の駅あんだい  
仮設住宅に変化。  
普段から人が利用している施設であるた  
め一般的な生活水準の住宅と同じように  
生活することができる。  
普段から利用していた施設が災害復帰  
時には、”あなたの家”となる。

## まとめ

災害が絶えない日本において、避難所のシステムや環境整備は逃  
れられない課題である。本提案のような避難所に行くこと自体が苦痛  
でなくなるような施設が今後計画されることを期待する。

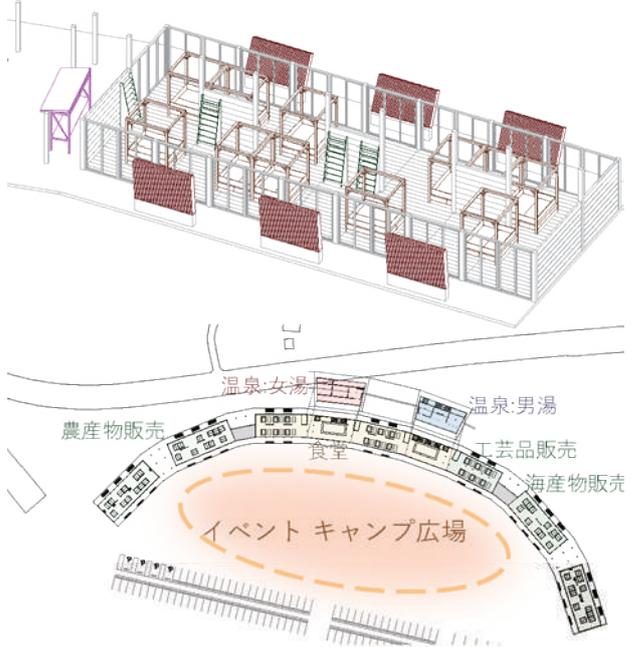
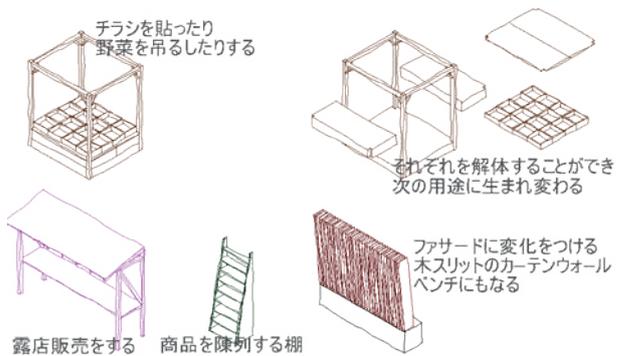
## phase1 通常時 観光拠点としての道の駅あんだい



地元食材を利用した料理を提供するフードコート



農産物や海産物を販売するスペース



所在地 宮城県宮城郡七ヶ浜町  
 主な用途 道の駅 緊急避難所  
 敷地面積 18,000 m<sup>2</sup>  
 建築面積 2,100 m<sup>2</sup>  
 延床面積 1,900 m<sup>2</sup>  
 キーワード 道の駅 緊急避難所 仮設住宅

Shichigahama machi, Miyagi gun, Miyagi  
 Road Station Emergency schlter  
 Road Station Emergency schlter Temporary house

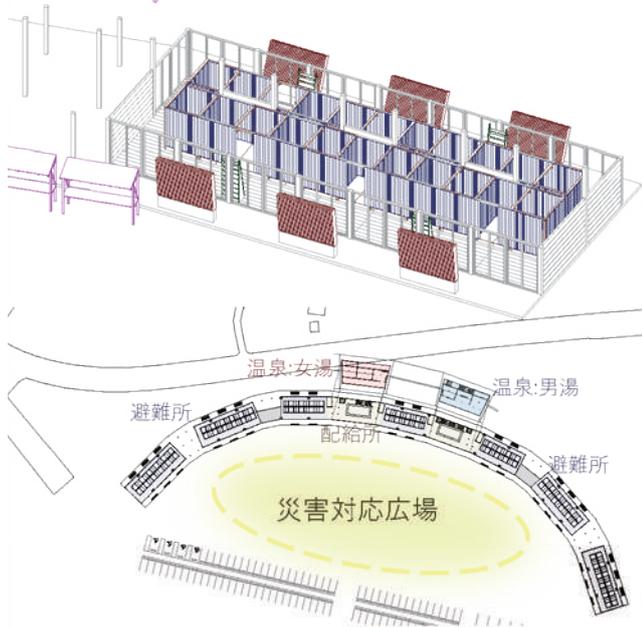
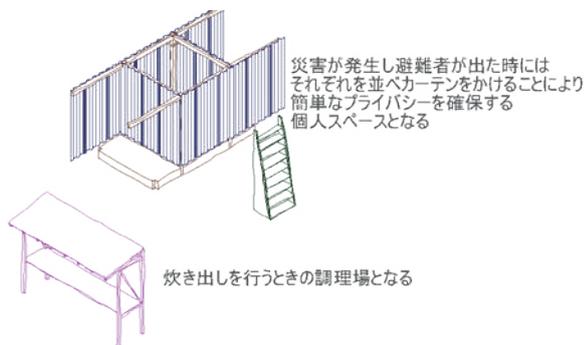
phase2 災害発生時 避難所としての道の駅あんだい



災害時には炊き出しや給水車が作業を行うことができる広場スペース



棚を変形して間仕切りにした避難所



phase3 災害復興時 仮設住宅としての道の駅あんだい



温泉は共同浴場となる



壁をはめ込み仮設住宅を用意。広場は共有庭となる

